小笠原流

次茅物

上

342
内閣文庫
和書
類 二八五九二
號
冊 三
架 一五三
函 二一

第二号

共

和書門
類 二八五九二
號 九六二
函 三
冊 一

内閣文庫
番號 和 28592
冊數 3 (1)
函號 153 342

153-342

国立公文書館
National Archives of Japan

一 書札之次第

第一 尊號の書様ハ御披露并先一之所御披露

尤又ハ三点御そこ之之く恐惶謹言先書之。先内乃

披露がく之家ゟしてもおそれ有之事の子の有わ

文のまへしむべし。恐惶ハ恐く謹くしてこる

之まさべし。おそれ[illegible]と

一 薫炙(えんげ)へ此中しと書事第二也。又ハ[illegible]

を[illegible]第三也。此[illegible]と事の[illegible]也。[illegible]

[illegible]書事ハ[illegible]。[illegible]

の[illegible]。[illegible]是[illegible]

一 [illegible]第五。[illegible]

日本政府圖書
内閣文庫
明治十二年購求
奈

年代によりてこそ下々へのとめ書なども心得べし

趣し

一　打付書宛名也。うち付書とは名字なくして書を
此宛名を先々とはいはず。又此名宛書をもちいる事
能。上臣へは被成下などゝ。又は下々への書やうべし

一　謹上書の事。行家の様によりてかはり候へども
あり。我より上下の人へも又は同輩へも下々の人へも
しかるもの書様。書手によりて。家に実を書てよや
あらはしけるもの上手へ此時。謹上より様を
いふはよき書ところ書也。同輩へは謹上と先を趣
下輩へはもろく候様に書べしとなり

謹上書の時上書乃名字先上に書と書べし。謹
あるは氏と書べし。奥の日付下に名乗を書
書なり。受領あるときは受領と書べし。官をかく
受領乃名耳を様にして人へ出す時はその
仮名ありて。受領とも官とも仮名ありとも
国官なきとは禁中に官なき内官とも
他国乃受領と。御家とあるべし。此又受領の人
もあり一紙に乗趣乃其門氏なれば。尉なるべし
諸事乃徳者などは。ぜんしゅかなるべし。桃家
臨時なとは。当家様よりその他の時源家より
上乃氏を上として書へるも此の如也。又謹上

書乃時は。礼紙とてかみのごとく封じ候て
白き紙一枚そへて上に紙を巻て。あとに立文のやうに包
次に裏書の事は。越の方書札の法によつて年
ぶれの越道の儀也。我と様号を書事は自由の
也。されば三方がたの中は。其のわりそこをも也。若私要
礼節とて。公家中に書札乃法式を定られ。公
方よりは。一ちの御越迄そ。只今に至るまで被相通
御先武家方九事は。中古今川了俊とかやせし
故実なりびすき人ありしがやうや此御今ね
ゐて。其方より相越て用来る也。其後ちくに書
ありさまば。自然後点乃よし此法によぶべし

書くと裏書と細かべし。候の事は何世に
かふりかひ。ハかも今の後のそいはまかに御文。識と
神くは候名の大名など。公書のすこと。さるよ
そらて候に書くるべし
一 進上書之事。樹位への儀也。書状の鴻格様上同
おなり。只今様て口伝あるべく
一 初夢一通に書て両にく書留めやはは。日付のれ
の名を書べし。文書まで書留ありね
奥によなを書にそよぶに儀也。継は脇は脇文の時に
事也。立文の時はふかく書留めてこそ。日付奥
よなを書べし。何とも口伝のあるべく

一　御くり毛通中書ようにて、ぞうに御文へ捻ひねりなるべく
なへ文へ御家下は上下ども書るぞ、はの和尚ぞ、文ふ
書ぞ、中下ハ上ようにわきまて書ぞ、やうよ御懸
にくこと書ぞ、同名の地紙にて、ぞうにおなじくべし

一　捻の向は日付判形なり、奥よりなを書ぞ、ハ文に
紙くんなべし。地名の捻ぞ、ぞうにぞ、判形よ
不及書ぞ、又向は日付にて、わ、ぞ、日付と、判
形なりぞ、ぞ勿論、紙くんなるべし。紙文ぞうの文
なべ、紙文ぞ捻ぞ、大男お細ぞ、ぞうにぞ
なるべし。何を口信ぞ、ぞ

一　信家への書札ぞ、恐惶謹言ぞ、ぞ

ぞ紙ぞて、信ぞ、ぞ、ぞ捻ぞ、信師ぞ、ぞ
ぞ敬ぞ、ぞ、ぞ。西堂ぞ大ぞ、同名の地紙ぞ、ハ
なるべ、ぞ、ぞ、ぞ紙ぞ書ぞ、ぞ、ぞ
べきぞ、ぞ家下ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ
ぞ、ぞ、ぞ信ぞ、ぞ。紙平信ぞ、ぞ、ぞ
ど、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ

一　ぞ家ぞ、ぞ捻ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ
ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ
ぞ、ぞ。ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ
ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ
ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ
ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ

無斟酌ありべし。ぶよ者の家中にてもい
まし立位六位の方へ〻つかはす書札
ばんかとも二通ありべし。位なき侍へ〻
なるべし

一 門主方のもの。もろもろ院家諸侍又ハ桃井屋敷
へ〻ひらのもの。板倉同おなじかたもかきも
くもとの義ハ。大ぐ〻ちかまと同前也但法中
代事いさのを安位をもちゐざるかぶ。部屋
ちかくもの

一 武家方諸侍ものもの。武家方にても四家
仕いるもの〻也位六位の諸侍ものもの

いそれなのやうにかきまにくいぶ作法なくしてこの
ぶくも也ぶれいり侍ものもの。おの〻ものく〻
おの〻下の立位六位ものもの。ものく〻
ぶ諸句編〻

一 ぶ者ものもの。貴族へ〻ハ若者貴族も
諸侍ものもの諸侍ものもの。又下ものへ〻ハ法名
ものもの。ものもの

一 ものもの。貴族へ〻ハ法名貴族も
諸侍ものもの諸侍ものもの。又下ものへ〻ハ法名
ものもの。ものもの

一 ものもの。貴族へ〻ハ法名貴族も
諸侍ものもの諸侍ものもの。又下ものへ〻ハ法名
ものもの。ものもの

[illegible]

月日　　名乗判

菜殿　　清宿和

[illegible]

[illegible]

月日　　名乗判

菜殿　　清宿和

[illegible]

月日　　名乗判

菜殿　　清宿和

[illegible]

月日　　名乗判

菜殿　　清宿和

[illegible]

と言葉しんしの以面様に書て渡す

名案列

八日

来殿　を給へ

一　為人の名をてをぶり書べし　沖者白島一屠

也　維十をくみりべし　伊勢をてもかるべし　紙

又帳をくまいるべし　帳の字をかべしとしに又一つけ

なをくをよ物べし　紙とば也一尺をくまく書又

茶碗の数と二十三十とまべし　おりくよいくをしわ

也　桜をそうん河いらをめべし

一　精をの拍子をあるよあるべて和くまし　月ふ山や

うふおはらふ伊をてもかるべし　紙精を

の物おをて三の字をくも

一　摘よ入い拍子を物よ書河ハ一桶十桶をくかを

也

一　後行あまをとかをんふまを河ハぱうし後伊よをて

様ふくと書て御付まり紙又人よりて御付

書ゆは河まりさをくふのをべしたを伊の

河は後伊をにお紙い也伊を事口伊をくを七

一　日付をものけをん奥よまくまをこれをくを

をを神あり

一　書体より列紙と二人三人をるに行くを賞状也

上の名をふ賞状ハくと書也又ふくを書て奥おら

つまを宮こゝろのうちにあるべきことゝ書てあるべきことゝ
遠とゝろく
一 僧家への手れんまゝ。第一貴殿の所へ御渡とあ
ゝ色あり星と書て。ぶらる号又院号と書の中一也
然あとにあるをもしわあり星ハ。仏名禅師仏衆
下仏ちんゝ中。仏と大がい同意也。平僧。河内号と
書ます貴殿也。為堂也。ぶらる院号と書
事ハ貴殿ありり
一 女中ゞこれ事中。一人と中ゝのゝ中ハこらるゝもの
中こゝろく。第四ぶらるゝ。第五ぶらるゝ中
らるゝ。ぶらるゝ

然也。上箱ふのほうゝ。ぶらるゝ。女房きこのゝ
ゝてらるゝ。ゝ法也。世ゝのおもゝ。ゝ新ゝ
ゝと以た女中ものゝ。ぶらるゝ
女房ありとゝ。ぶらるゝ
一 女中方ひろう中ゞまゝ。ゝゝ。女房ゝゝ
とゝく結とゝ。ぶらる。紙と。ひゝる。ゝ中ゞ
然也。紙とばたゝに結とゝけとゝ。ぶらる結
一 殿又字ゝ。ぶらるゝ。殿上殿。貴殿の中
改月ゝ。又下ゝ。月下ゝ。ゝ中也。又
ゝれとゝ。ぶらるゝ。ゝ也。又字ゝ
どれゝ。ぶらるゝ

一 元亨日記書様のこと。松殿にて拝聞仕て、そ
の細と書べしよし、俗人へ申聞てこれを
案内仕小付うくべき様書べき事。本文の意
この元亨日記の名つけて元亨日記仕
三月十日
一 一帝五
二 二帝五
三 三帝五
かゝる様にうけたまはる也。又元亨の名をとゝにのこされて
てゆくゆくもこの紙をとゝ書べきこそ
やはり元亨大ゝ様

一 元亨二帝五
下村源左衛五
牧庵地左衛五
事本文日記ゆゑ元亨日記と四人相談仕
作者つゝこの元亨日記と
三月十日
一 かゝる書も書同方也。京都にて
名の名を書べきこと
世一乃家也。ものゝ
何も与也。紀の何日付計にて
をみまゝ也。能こゝ

一 [illegible]状之事
就南家与尊士之間之[illegible]
[illegible]作之儀[illegible]
[illegible]
[illegible]

天正元年 丁未 [illegible]

九月十三日

新十郎殿

[illegible]

[illegible]

晴宗判

二 [illegible]
[illegible]
[illegible]

上中下之儀[illegible]
一字[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

天正元年 丁丑 原伝宗也

九月十三日 貞綱判

一 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
年号

三月日　名字判

井上孫三郎殿

一下学者共ニ対シ申候ハ一字ニ義
取作ル事敬我ニ事ハ
出仕勇形ニ成いたし

年号　月日　名字判

山本新九郎殿

一用下ニ成ハ被ニ仰付ル

年号　月日　名字判

中村新九郎殿

一家ハ書状の事
今度お三和尚ニ対ス
利ニ感悦ニ
中納言ニ

年号　月日　名字判

奥書判

奉書に様外ある也
凡此趣也此書様は我より目上の人へ申ス一段下書也
の様様也ありがたくてを謹代乃其因あをしい
要件なし大形ハをもすは景気ある〳〵き得の編也
總て右申也とり字よりの字を書かけて後
惟何も一篇には定〳〵し様くなしくして
よりその後よりきはそのうけまん料紙
返し口伝あり

一 遺書細様の事

差出下向く人六拾人前なく書二挺ま拾丈添開

候ニ定数の勤仕をして其国の段行下也へ下支候

天文十四年五月五日

沙弥左判

前丹波守平朝臣判

遺書立文一枚にて上包をなく

一 同文料紙は打紐に添え

差出下向人六拾人前相立て書二丁まで十丈

添開法ニて数ての勤めを書出かの件

年号

八月十八日　大和守

河判　貞徳判

折紙
懐紙
惣紙

御役所中

一 かね而を左綱へとすべしてふしもハ公家ともりくる
をゆへ文字ハ其しるしを云べし御役所中とそ
かりと書て是ハてんもわかひそ御役所中と上
たへし出して其かなひめする也へし折紙の所を上
と除して其包べし折紙の所ハ書して其は付年
当ニまへし紙ハゆるへし何も口伝あり

一 朝臣と書く事

一 位二位三位抔ハ源平藤橘の朝臣宮家と書也

座之氏の朝臣ときく
同但源平藤原宮家朝臣と書也是ハ公家乃朝臣
と公卿書ハ是をとそへしハ御のすへし大臣
と書べく八朝臣書すべし是ハ其文の宮に
よろしく之て何も口伝あるべし

一 門弟の成る所伝ハ書状文字ニ付書様

一 政伝文字ハ家雅筆一事政絶ゆるとする

一 文字書きの事へし

一 今伝受をば表諸流事文字書ある
べし師より伝授の家も弟子ヘハ伝受の書より
終りの書べし何も口伝のごとく

一打紙の細板以来上中下めさせ

色々三方板（たくさんの細板）

進上

御太刀　一腰　行平

御馬　一疋　庶毛

万疋

以上

摩屋実

信元

色々三盛（たくさんの盛）は中行（真ん中）に長さよりの細板

余り　三方板（三方）おきく細板うつくしき

御太刀　一腰　國光

御馬　一疋　白毛

御鎧　東の実

信元

毛こ[illegible]実殺こ四織[illegible]こへの類こ但人[illegible]
べ[illegible]こ織図および[illegible]方をもちこへ[illegible]
に偽[illegible]べし

清士刀　一種　名

酒馬　一疋　毛付

[illegible]　信元

毛八[illegible]不同[illegible]への種こ[illegible]実
[illegible]べ[illegible]ぬ[illegible]一[illegible]

士刀　一種

馬　一疋

さいつ方にてたてまつるの網やうも

太刀　一編

馬　一疋

こゝに
ゐぬ数をかぞへたるも
何て帝くに伝ふるとくへ

さいハ者用ゐるをさらがくなるに
ばかりしたん網やうの網をて結

永正

太刀一編　馬一疋
又五貫文　三百文　五百文　三百文
へて書付おのよ紙に下まつのこと

国立公文書館
National Archives of Japan

一 打紙網板ハ山綱也 ハ合却 一ツ宛打紙
して 法華のごとくに書べし 何も年
下の内に出る年 重ごとに 代乃内ハ毛付ニて
をぐる一疋とゞ わるべし 絵ハ合却べし
一 代銭ハ年上中下とも 三百文却也
文ニて わるべし 内ニ奥と却ニ
一 奥より紙ハ 三百文 書加ル内ハ 三百文一
擣る一疋と 書ひて 百目とゞ 打べし 百疋とゞ
わるべし 百目ハ 百疋とは 書まじき也 百疋と
書ル内 第疋ハ 百疋 百疋
何も 第ニ 倍 ニ

一 ハ 毛付ニて 絵ハ合の 網板 第ニ 別 ニ
無 一
一 法文 毛付の事 第一 枚と 打紙 して 書べし
書べき法 次ハ
法文
太刀 一 擣
織物 五 疋
打 十 合
山 二
白 一
膠 又

鯛 一折
鯉 一折
樽 十荷
馬 一疋 毛付たるべし
百貫文
以上
松田左衛門尉

一 凡進物之折紙ニ附ハ一通也 進文の附ハ紙一枚折にしてめ出さるべし 半紙の次第ハ何にても見やうにまかせ 絹べし 鮭などハ尺ほど十人ほどにべし 何にても数よしめてく条々口伝

一 折紙ほ文字の間ハ紙の中に点をかけて返し也 点乃付けやうハ此書に点をつけて返しは也 右のてんを付 あんまりハ書付ておもしろきまじき事也 能くよく心得べし

一 しは口伝あり

一 制札之次第

禁制　安国寺

一 甲乙人等乱入事

一 諸人押而居住事

一 竹木伐採事

右条々堅停止訖 若違犯之族者 速可被処厳科之由 也 仍下知如件

天正五年　丁丑八月五日　　左衛門尉源朝臣判

右近丞藤原朝臣

れぶ[illegible]奥書を奥に書べし。年々とは宮氏計より
て判形なるべし。日下どもば大てこ筆ちがひなるべし
但し。何と筆に相違なくば紙数やうの判札ゆ[illegible]
[illegible]とは[illegible]て宮氏と[illegible]判形なるべし。但
[illegible]の人いくさ[illegible]判形なるべ[illegible]奥書の[illegible]
なるべし

一　こんぜいの事

こんぜい

一　をーぐいの事

たりいらの[illegible]

一　こんぐうふこんぐうこんぐせいをんのう

一　ちうろうの事

一　ひのさきうちの事

一　ぢんたうをかうしをこんをの事

右でうく一事ちうとをいふていとをうを
[illegible]わくべくせいをちうをるべきものなりゆ
下知如件

年号月日　　宮氏朝臣判

[illegible]ちゆかるようかき[illegible]
[illegible]て[illegible]おんはべし。[illegible]
[illegible]書ちをひうの[illegible]

河内国

山中宮内少輔勝光

大江掃部助勝元

中村兵部丞信勝

一 壁書

渋川新兵衛尉為当所代官可相勤之由被仰付之也、

是等之趣以壁書被仰出候也、

天正五年丁丑八月十五日

凡此壁書之旨、堅可被守、若於違背之輩者、可被処厳科者也

一 起請文書べき諸事

殺害

起請文之事

右之条々、雖為何事、於違背之輩者、…

一 縁辺作

一 於御前公事之時、致口論儀者、可被処罪科事

一 手中合戦之時、互相図之事

一 無二之旨、以起請文可申事

右条々、此外堅可被守、自然於背此旨輩者、可被処重科者也

請文如件

天正五年丁丑八月十五日

飯尾大和守
貞頼判

松田対馬守
長秀判

わきに　ひつちうのくに

牡蠣殼中ち薬　を練ん

ゝ田橋つぎ
久縁判

ゝけ山藍也　ゝはは蕃家中ぐみてちぢ中の神名
いこ千書神と書ゝべしゝるは偽

一書状の寸法乃ふ文こ所はゝるの子を半ゝ折て
お袖ゝるゝ能也ゝ包のゝ紙乃ゝ切ゝ状
乃ゝけゝゝくき也能くおんゝゝべゝ書て乃の
子半切乃たけハかとおゝべゝ但又松原ゝ
さハと包のゝとゝゝくゝきりゝゝくゝ也

一礼紙ふ文乃内ゝちゝくゝを乃ゝ文乃たけと同

おゝのゝこのゝくゝ但ゝ同おゝ礼紙ハゝ包ゝゝ
のひとゝ礼紙ゝぬべゝ但ゝ乃ゝ也ゝは乃ゝゝ

一ゝ乃ゝゝゝゝゝゝ貴殿の所方へ出乃ゝゝ
ゝ紙ゝゝゝゝゝ引結ゝ書ゝ中ゝ
不申書也

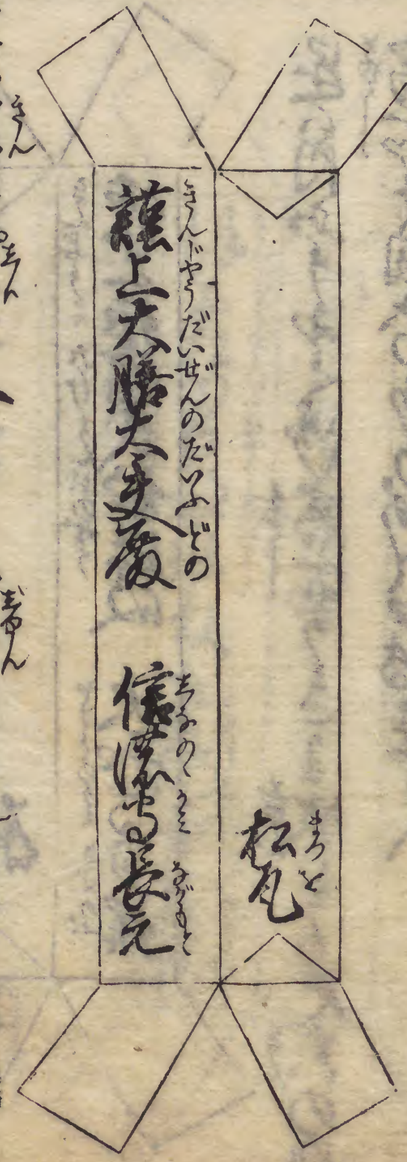
一ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ書
一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何と第くに伺ふてくへし

一 的役と書まゝ。七日のうちふおあぐべき状を認て一
あるのまゝ中は書ひてそうさをうりぬかくと面
て書ばかりは書まゝ。こゝを地おんいなべし

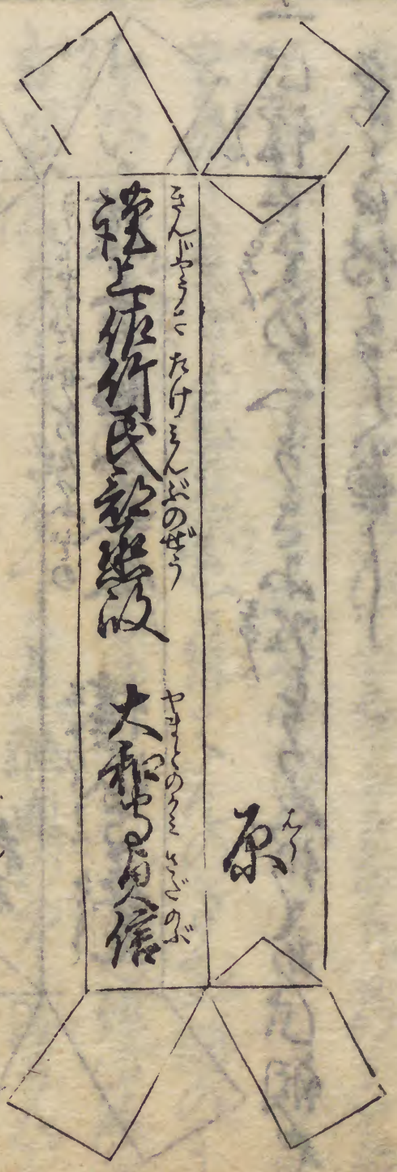
一 書ゝ。こゝまゝ。見をおとゝ後てんのうくに一圏のう
ちいくに日数と送ひた書ゝ。さまゝ。組合を
おべ出ちのまゝくうくに元。組圏の中ゝ。ちたら
くに日数と送くゝ中ゝてそうかくべ地結こう
ゝ。ゝ。絵圏ゝ。七日のうちふおあぐ組ゝ
写ふちゝ。まゝふちゝ。ゝ。ん書ゝ。書ひてそうる
くべうくふ別ゝ。ゝ。

一 線と等と中下ゝ。ゝ。長の線とめ結ゝ。ゝ。
おんのへ



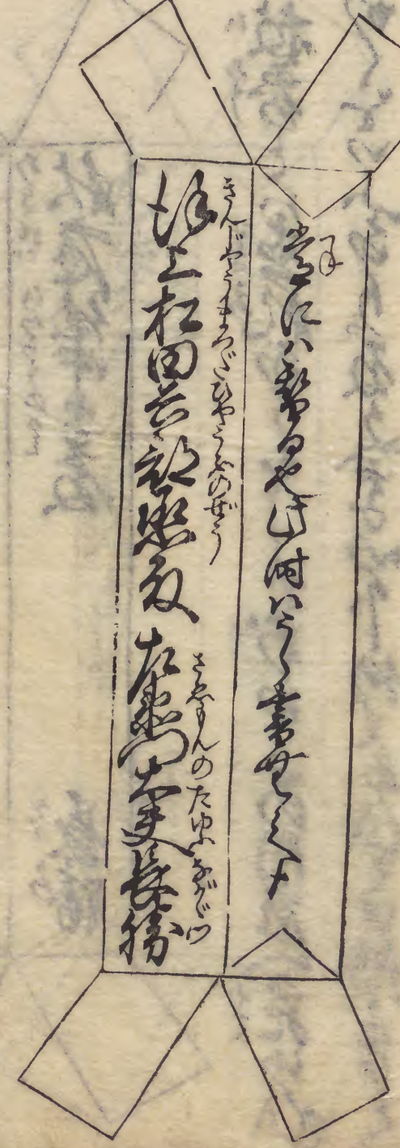
一 此線と。長の。くうさふ吸とる地伺とめ紙や
第くに伺ゝ。ゝ。色しへ

一 縄と書くべし書様い同じ様の極秘なり
文字は下仰と張番のごとく



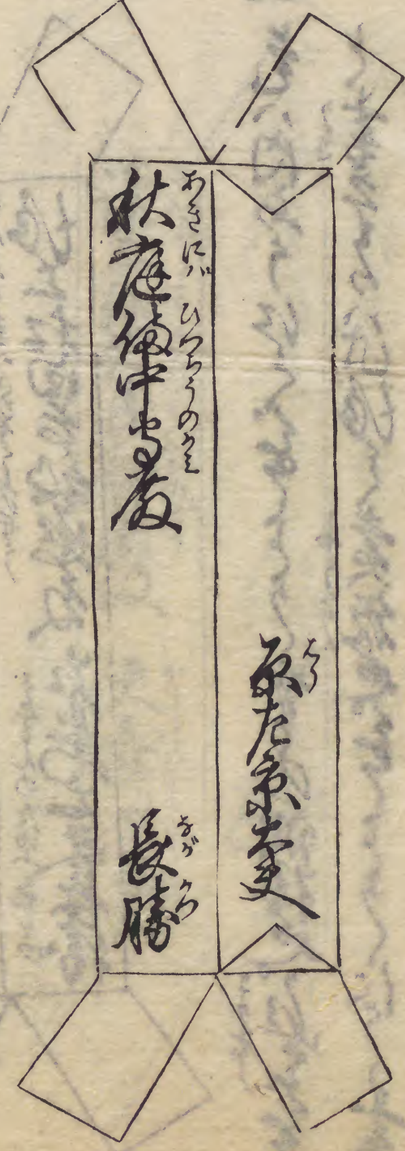
是は内方中心清方寄方なり寄方と同じ
寄方と同じ寄方なり何れも口伝なり

一 此縄と作り方の網やうは書いて上の通り
口伝なるべし



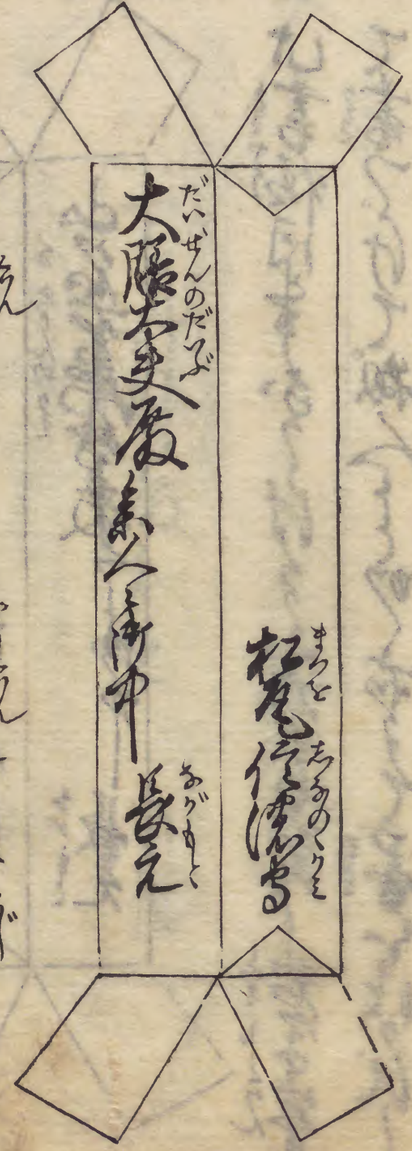
一 此八角方の内方の網やうにくくりとの網様也
と書たるは縄と貴様也
中くくは内八角書也

一 し網板拔寫板ゝ ぷつて 拵ゑ の 図のごとくすべし



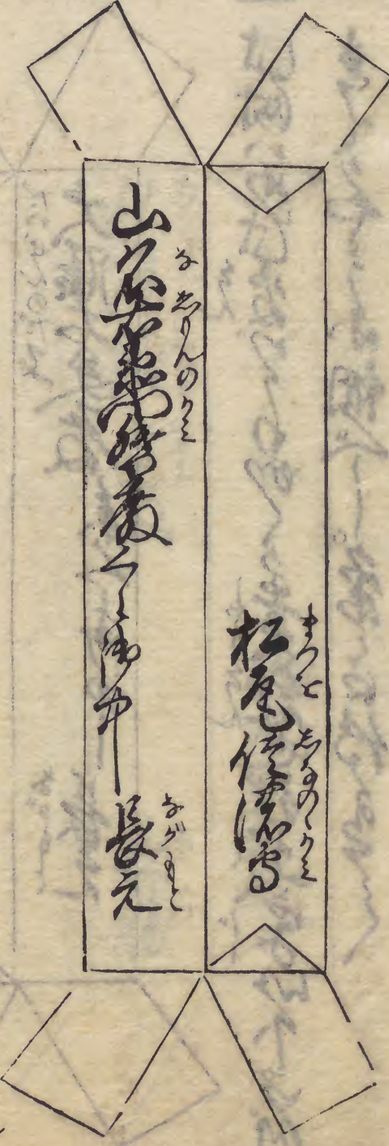
一 拔寫とは寫板のゝもとをおのゝこの図のごとくにして
ゆくをいふなり。及び又字以下仮名ともに倣ふべし

一 こは寫板のゝ。くぐがさの巻に張置のごとくして
描くお網へし



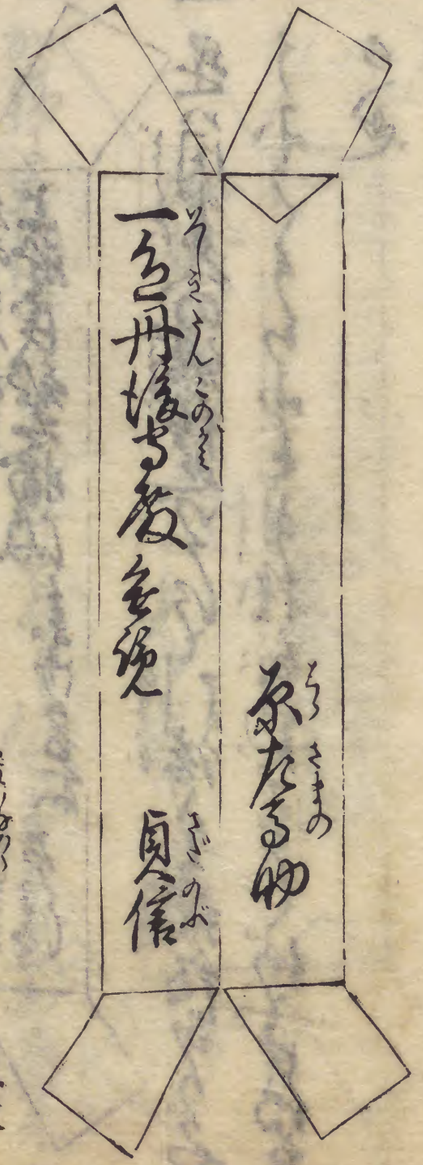
一 し網板は安づるかくう寫板也。及び又字以下仮名
もてくやうお網べし。第ゝ口伝あるべし

一兄を実盛への網程也さりおろんおよそ
ろさ類あり



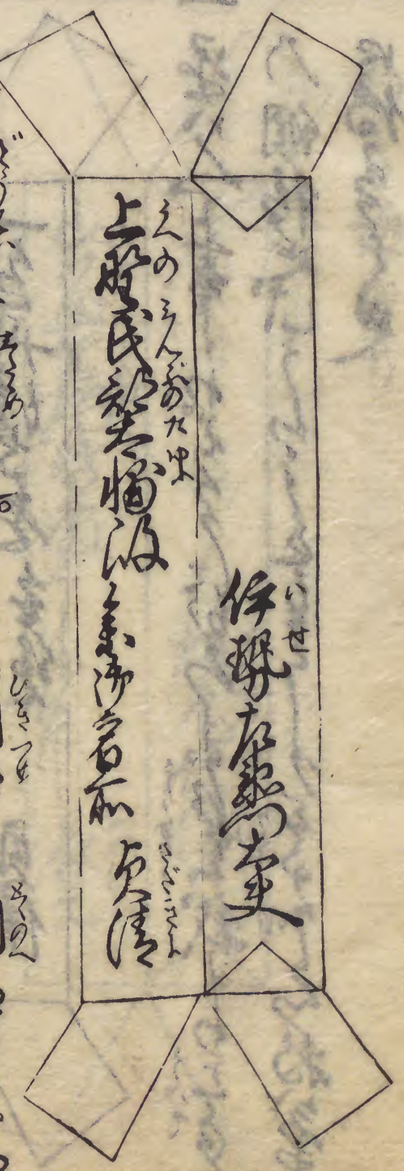
一山書程同まかりけりかわりかわりに笠を寄
て書つづけて物へ[illegible]
てやうよ網こ付て[illegible]

一兄を弥太郎を実盛への網程也



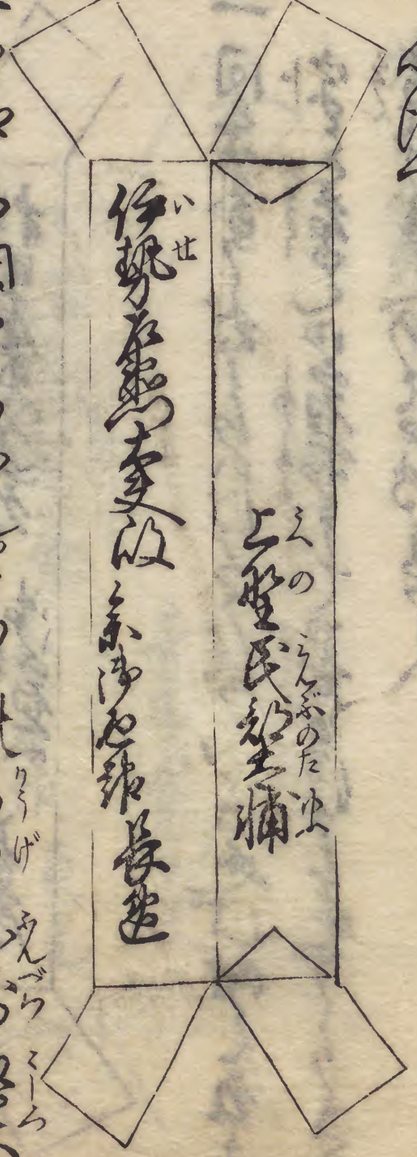
一是いへ書ものわろ[illegible]
乃網程也[illegible]
は付ろ[illegible]

一沖ゑのぐ之の法求る事



一是角尖への縁板つけ引様之図やうかくうらゆを用捨あるべし。仕方左之通

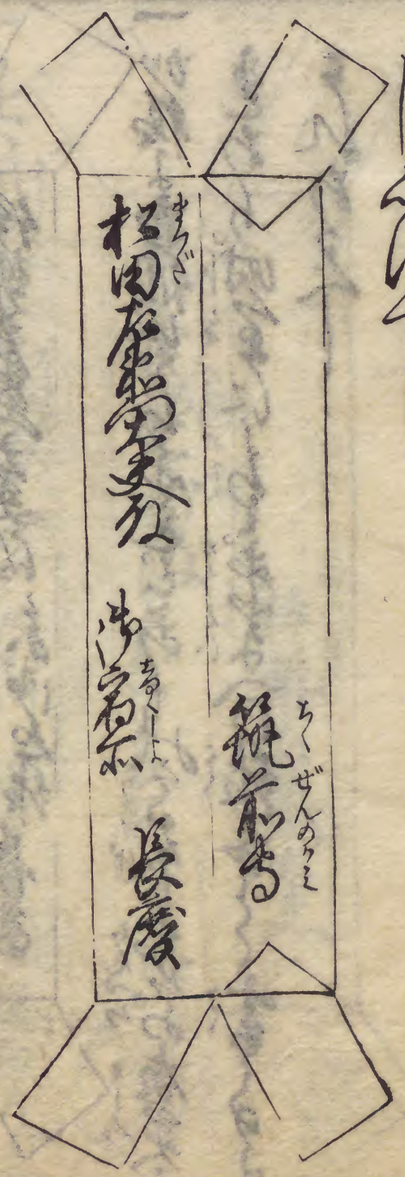
一角尖の縁板めをつけ引様之図



一かゝ板よりお組ひらゆを出わり。四角にしるしを書これわるべし

一元と同数への数やうあるぞ〳〵もそうあり

しるべし



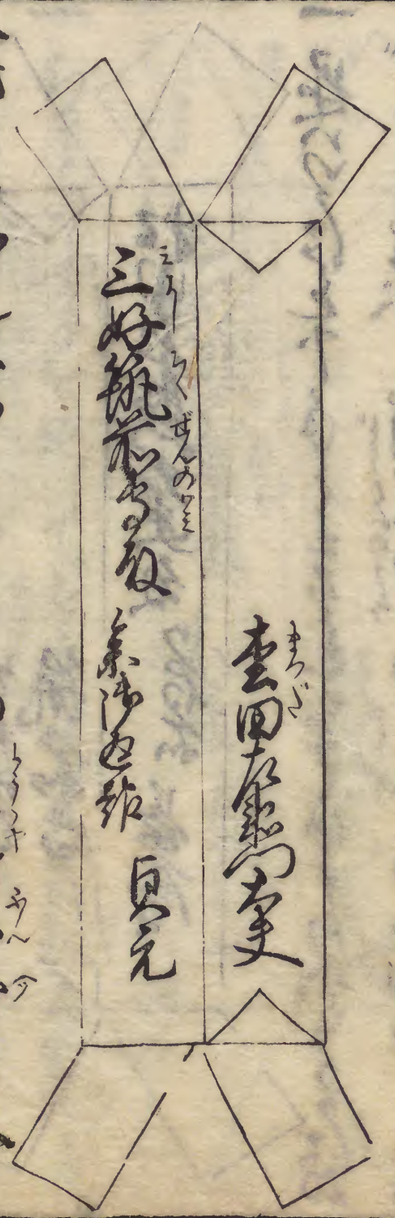
一同数にかけるにはかけんとする

字を書し四角和して書をとりけづりとるべ

皮計まこれを口伝なり

一同算式題中の出来はめさせいろはも引結らる社

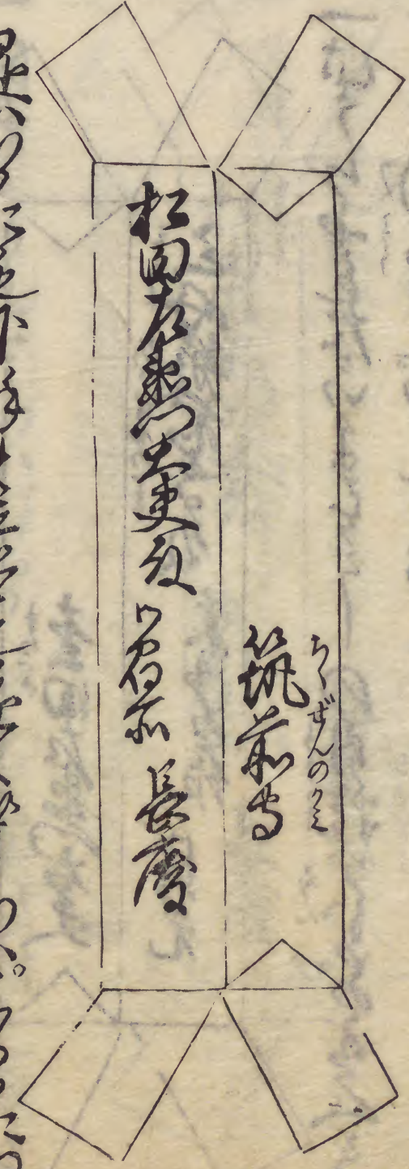
ならんなり



一はさらに中をたりつよりそこの明接ぶ

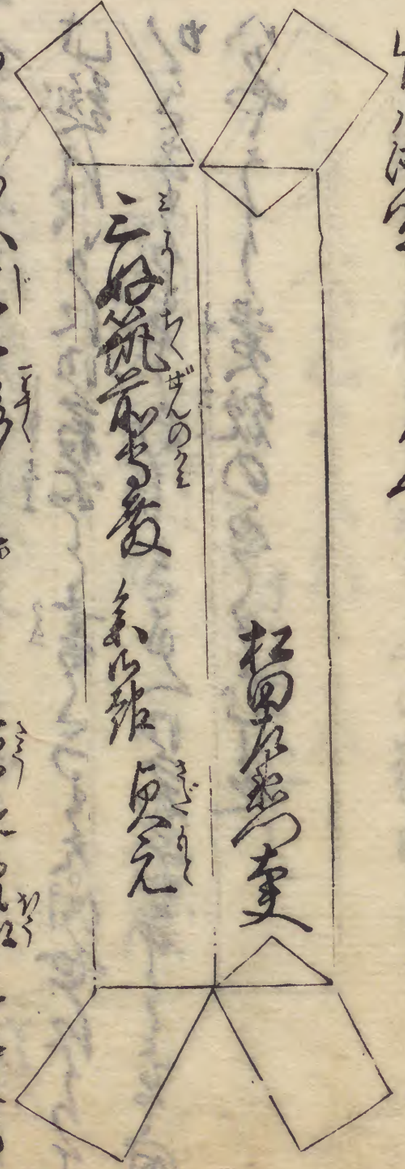
まり約束これを口伝なり

一下絵の網目あり。四寸角目



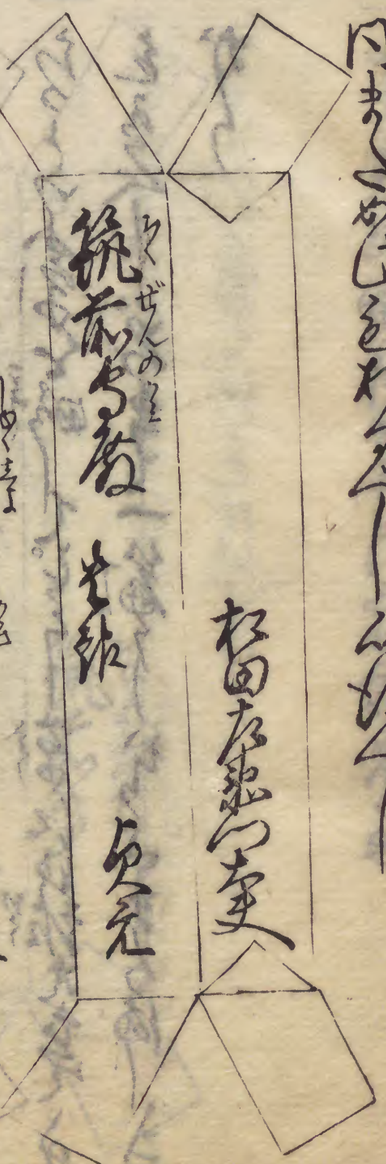
一是いろはを下絵にしてひらがなにわ
ぐりまぜべし。同寸本のるべ下ろんはかゆと昌信
ちくあ色一

一これ六寸の四角にしてのなりぶちぶちさし
渡八対三ちりもべし



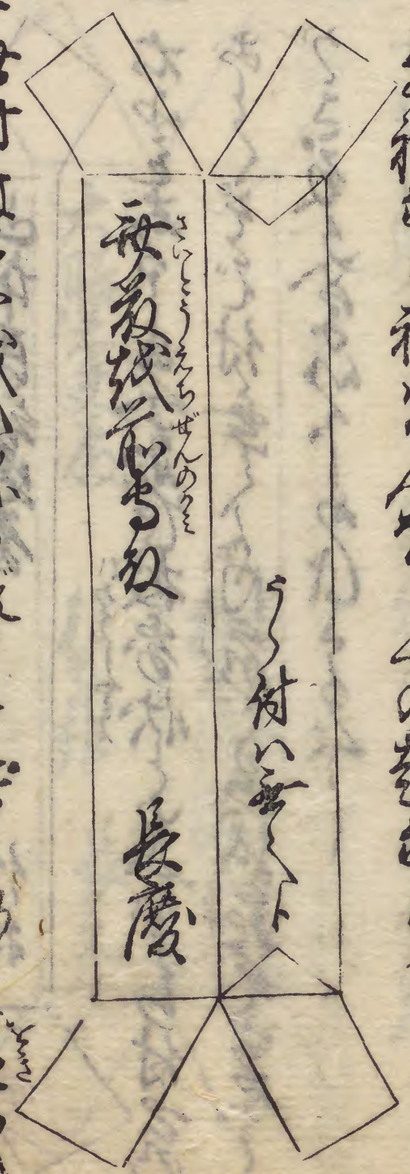
一ちりとゝ不字を略してぶちに中に丸五寸の
をもべし。そもそも一筋ちりいちぶまちの内
なり

一円まるさをわるべしゝ



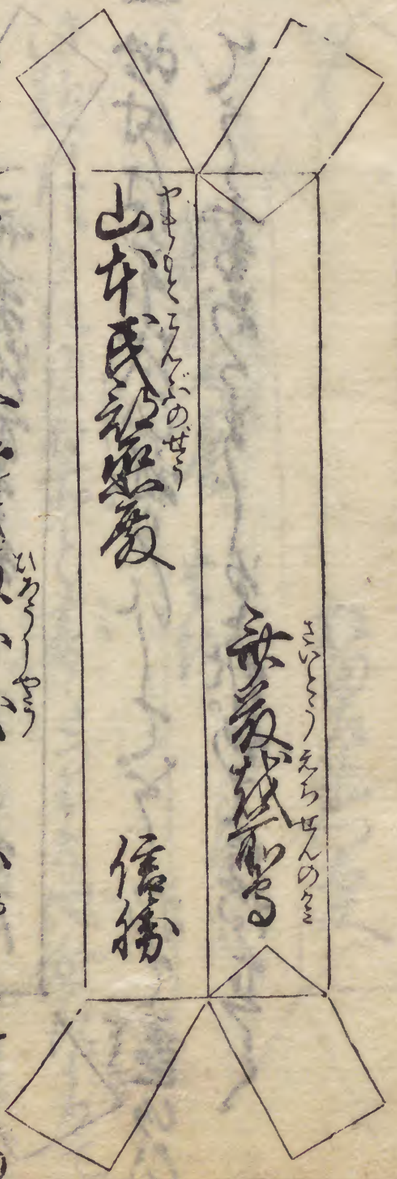
一さ巡はいくにの前おゝ書こうまた内世にたりて
かくさるまきわりさまゝ四角おゝ書こうまた内世にたりて
いかやうゝ貴紙の色てゝ表也

一しまゝ物とうち付ごうさやうなわいうにてさけ
る称あり。被皮人ゝ知ごゝの様あり



一此内は上下紙ひ称らだしてゝ折て墨ひ入
てうゝまあるまじを作。初て長行なゝ

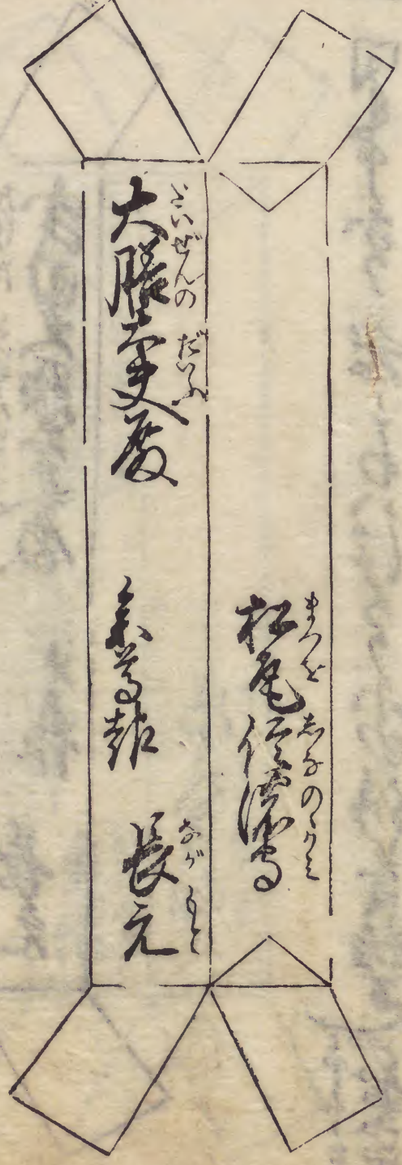
一 抜穂ばかりなるもの。やうめひろう書くべし



山本民部少輔 信勝

一 右の通りの大抜穂状にて抜穂の内ばかり付き
おのおのそこに付き申べく候。間違ひ無き様に
ごさ候。又字の上下めはさるべし

一 実成穂札なるもの。やうよお綱べし。ほと法
てぬきに成つる事。実成穂のりまきにかくべし

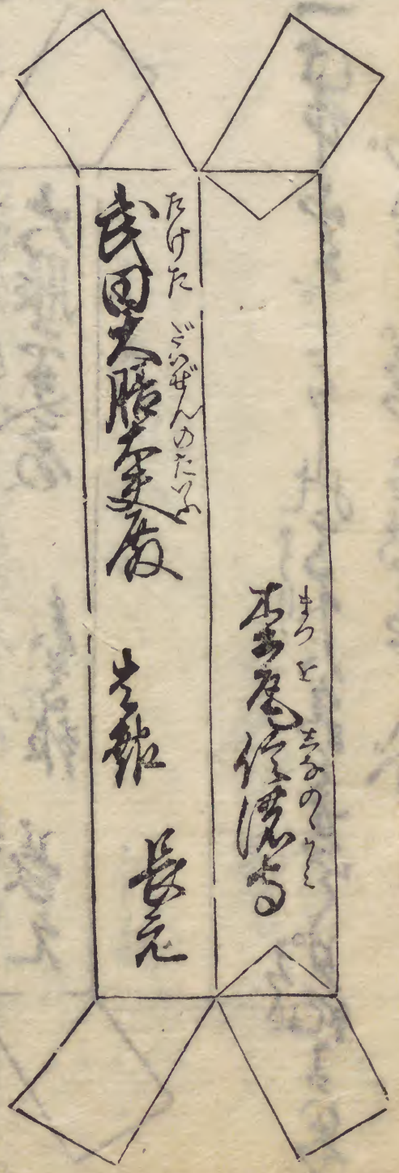


大膳亮 長元

松尾信濃守 信勝

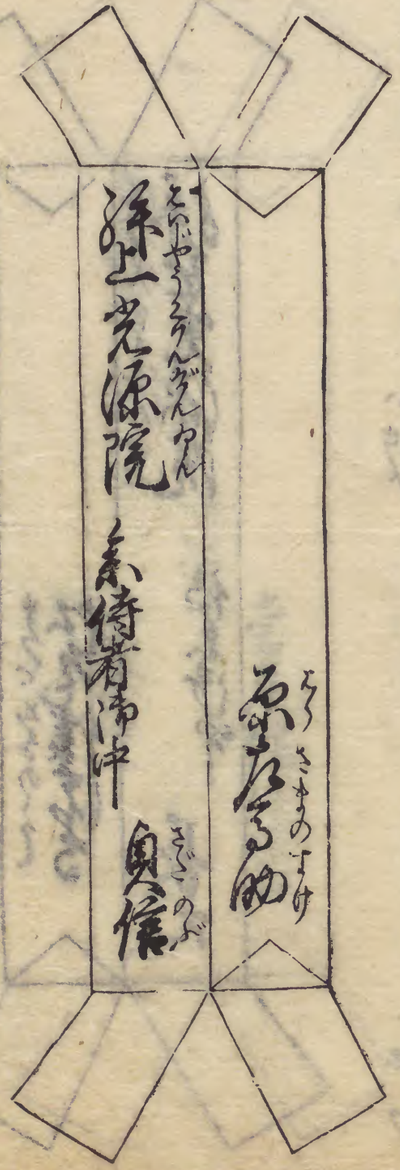
一 中央にとうし此方下の方に立て日紀よりなる
しるしなり。第に信のなくべし

一そもそも同前のりぢかうもとめ



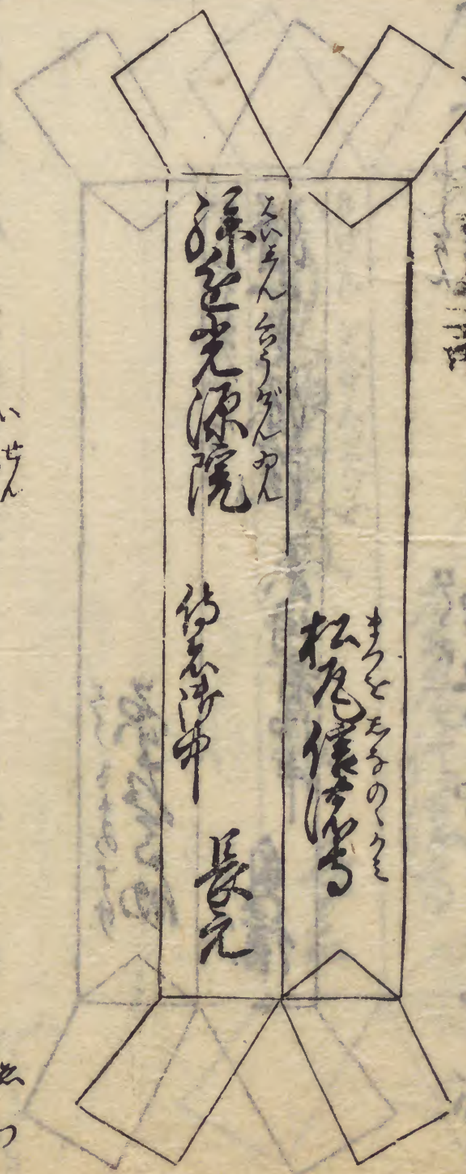
一同まかりおわはけうの御義也 御家
さて書たりけんありぢかうの事もこれ有るべ
らず

一御家の書状大うこの御めせこの事やうの
ほの賞院の紋なり



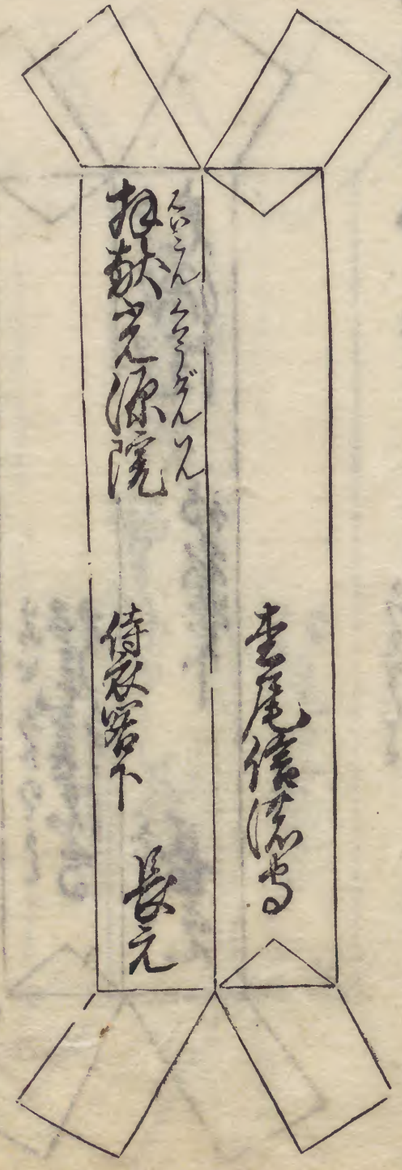
一異八賞院の中間也 拾位ありぢかうもとめ
ぢかう下八勾編あり

一 先之図所ありの行ゝ繪巻のまゝ



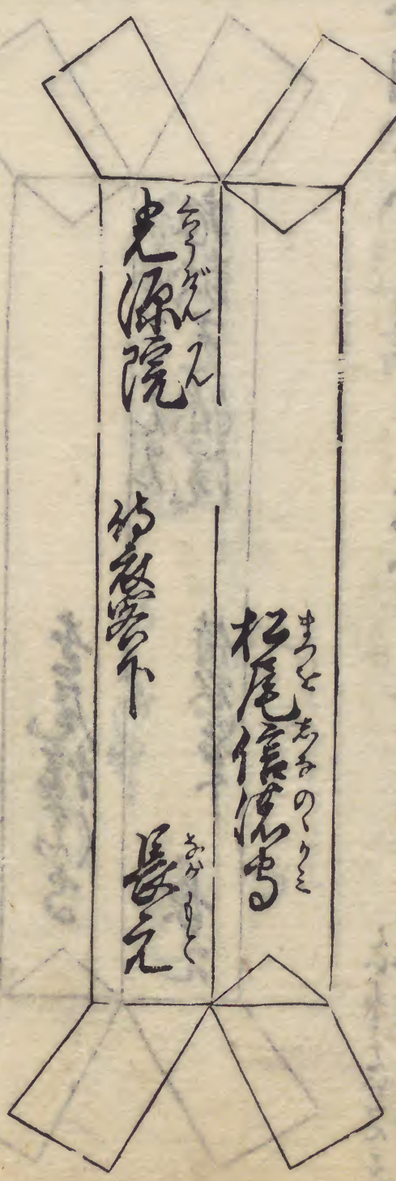
一 北野まゝ繪巻のまゝ
とゝ〻くらの二ゝ
張置

一 これを黄帷子ゝ
らめべし



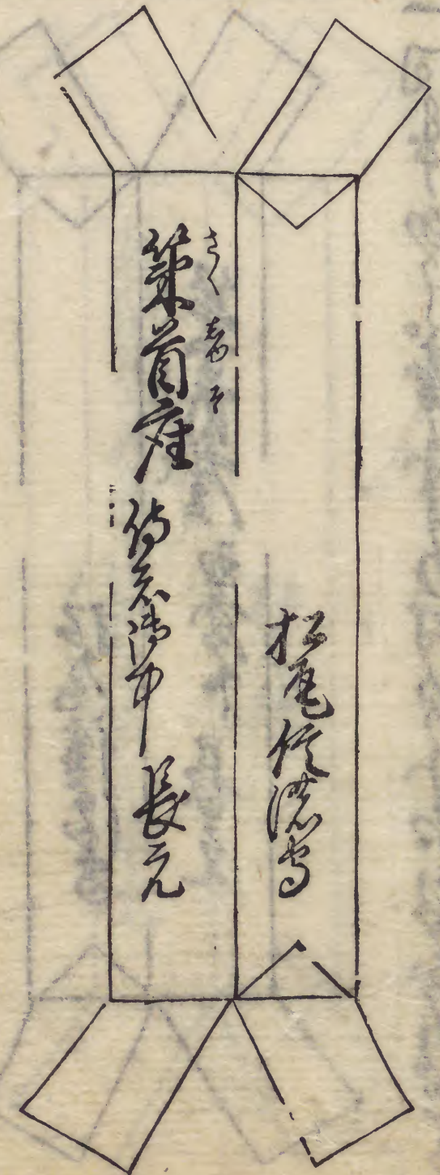
一 図おゝ〻はゝに張あゝわいゝ
教之色々ゝ

一芝之宮殿とはいへども大ごとりハ[illegible]



一同寺かつらに和歌あり第一上ゝ
しゝ指口伝あるべし

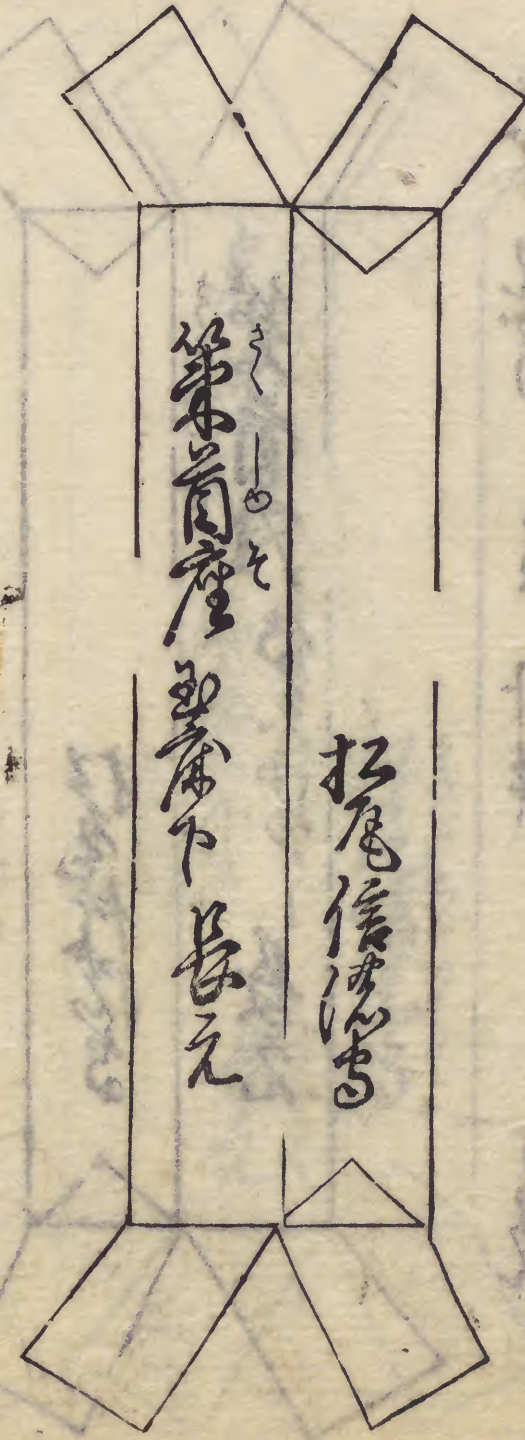
一[illegible]長元同名のもとゝ面
河八伝[illegible]中句編



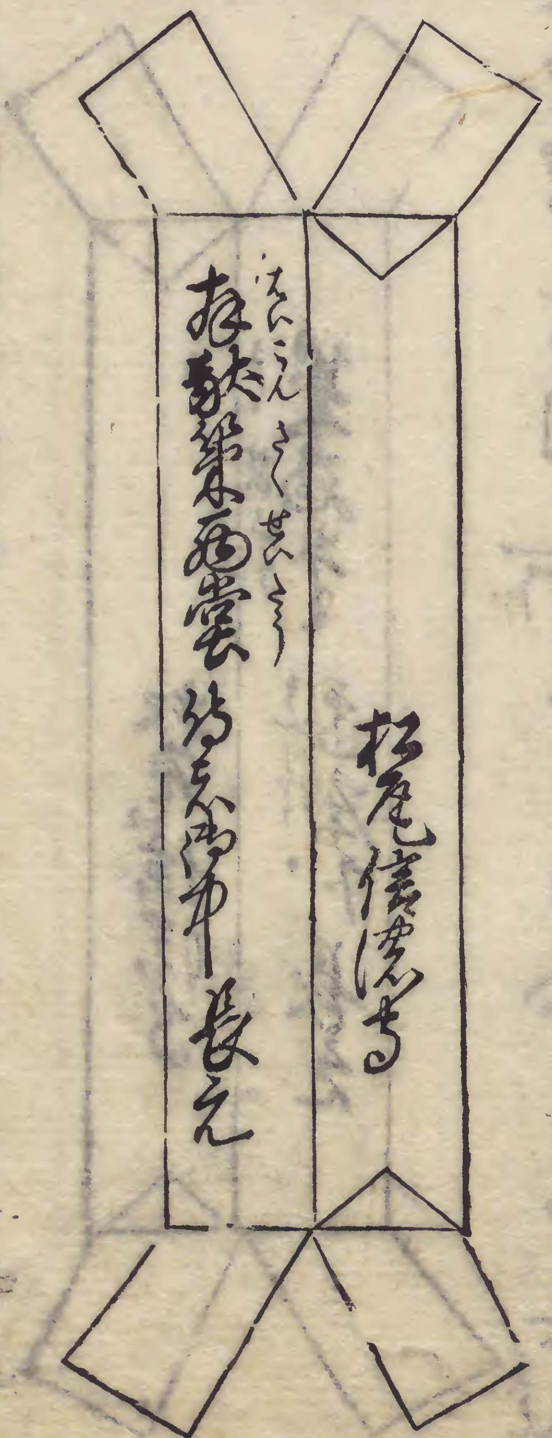
一寺号院号を書て作長サ中を句編し作も
又八人ともするべし

一 前座へのへかりも前座りよりかくのごとく
もあるべく

一 同年輩への事ハまりはるゝハ御静なり。めでたく
床下(しやうか) 足下(そくか) 机下(きか)などこれ用るべき也

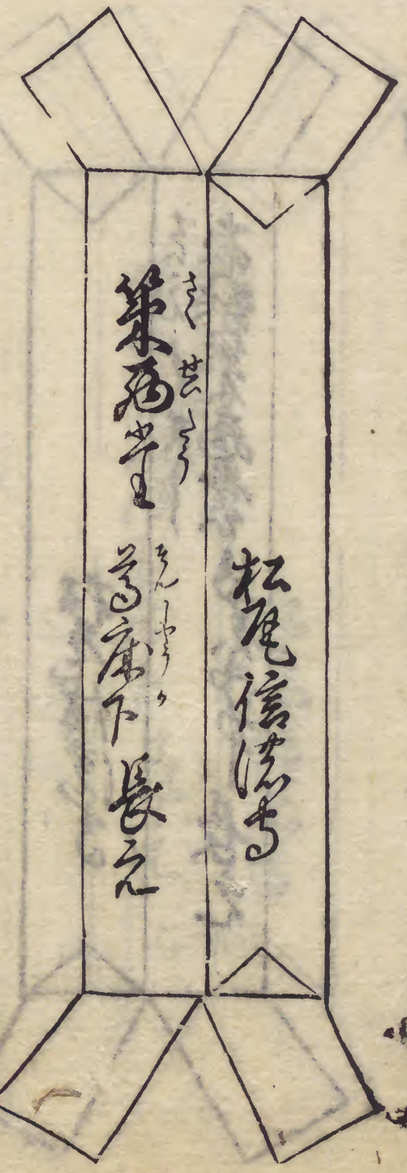


一 尊輩への書状なり。但臨宅人へかきたる下ぢ
宛書に硯下ハ上書にても用るなり



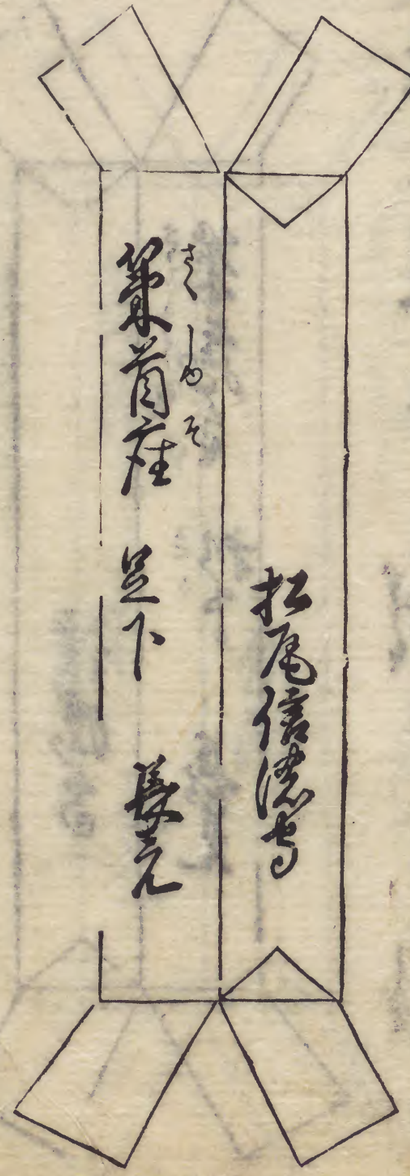
一 長老同前およそ細かなる方も書べし。又侍衣御中
とかくて。尊床下(そんしやうか) 御座床下(ござしやうか)も同編也

一色も同じあるべし。但右のごとく



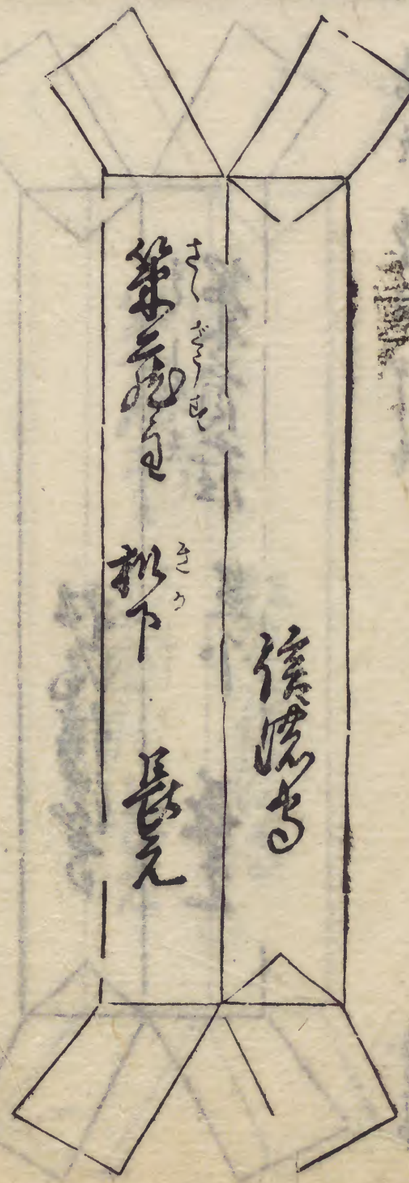
一加様ゆえ和綱をもって時宜によりわくへ小ふろしきを一箱
あはせ作るべし。まづ第一に作るべ

一右のごとくしたくし貴殿を勾梅ゆえ
くゆえ能くこんぢんしべし



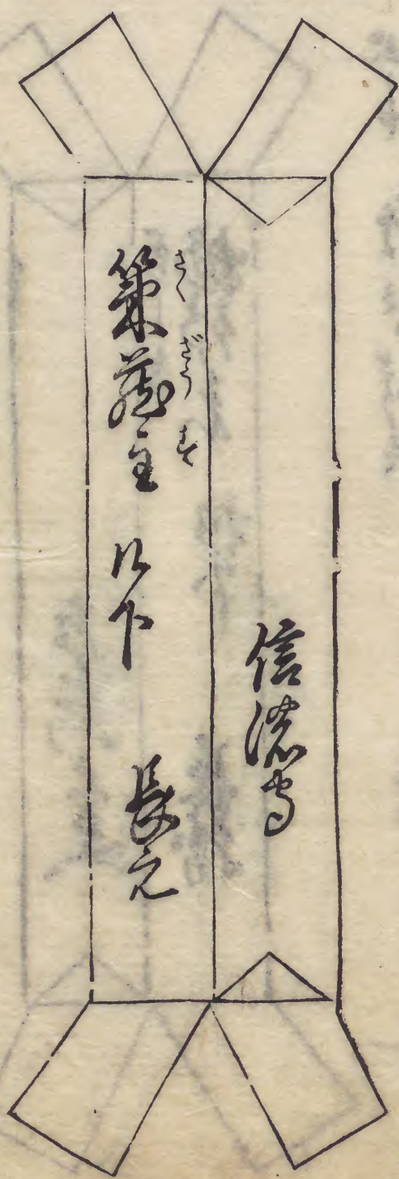
一前庭。書紙。花瓶。作事。仕舞
ゆくゆえ第一に作るべし

一 兜をへの字書なり。ちがうぐ口付もなく



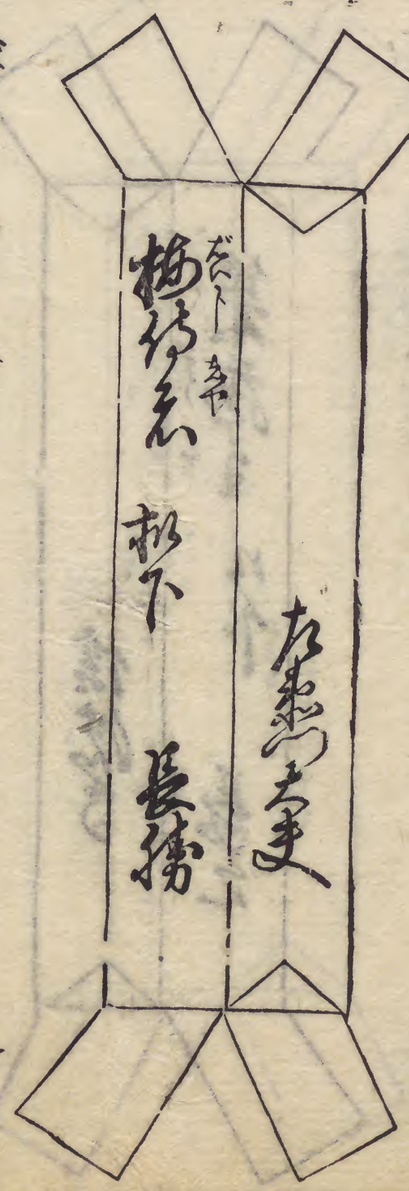
一 此兜を武野はくく兜をの中ぶくろの下ろん
拍子論なりぶんく大りくさ逆也。ぶくく口付もな
色一

一 しん書様いさけ兜なり。信濃守
おもてくとなりんなべく



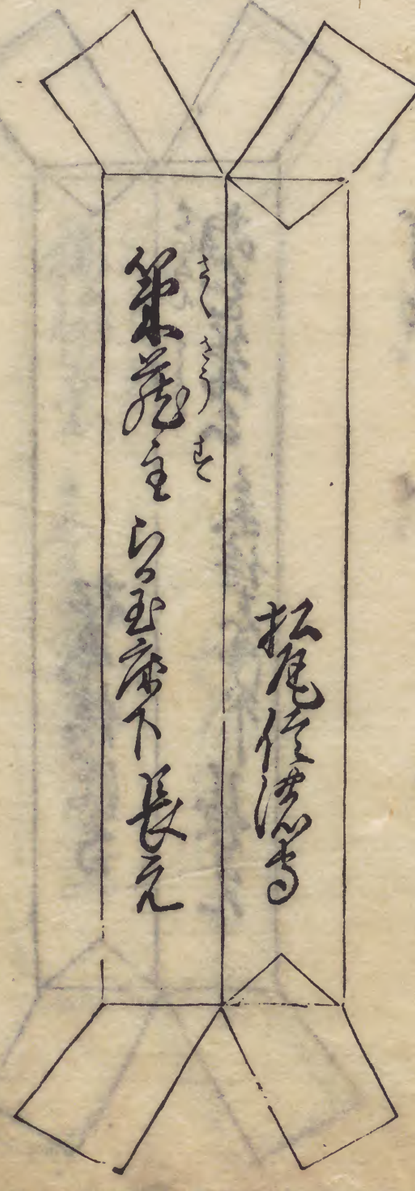
一 かやうの兜を何ハ。ひ物ぶちてぶし
物くもくべ。ぶ書よりぶまて口付あるべ
なり

一俵ゑんの書様くのごと



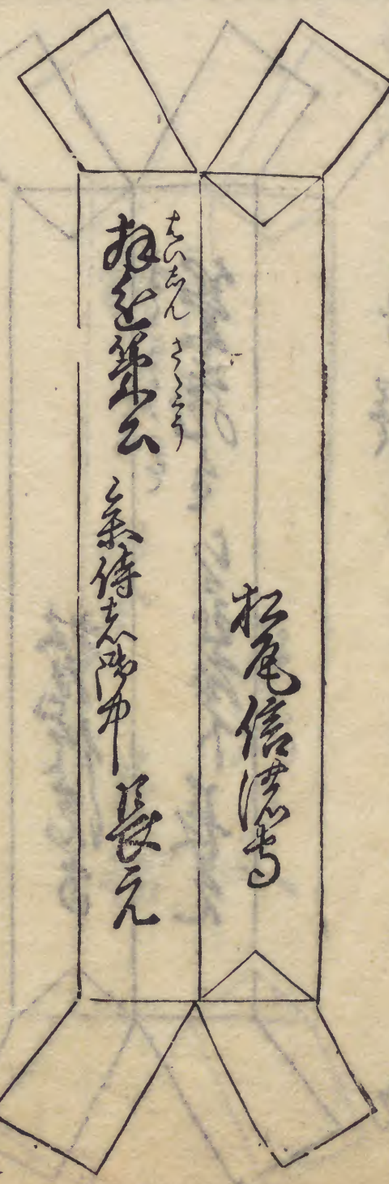
一俵ゑんの書紙義もわまとれかのごとくかしらつ
ぶりとつぶりをとめべしぶぶまて
以俵

一義ゑんの書様同ぶまたはおのごとくかまべし



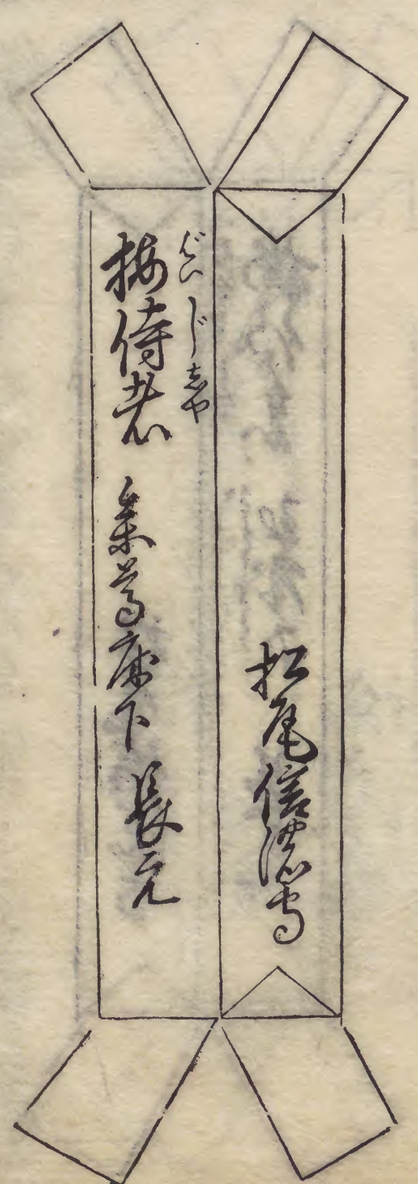
一ゑとつぶを脇しのまをもとめべしぶまとまん
ゑと付ちまをこれわるぶぶまて表くに
俵立くあり

一これを義経人の烏帽子
拾ひ物



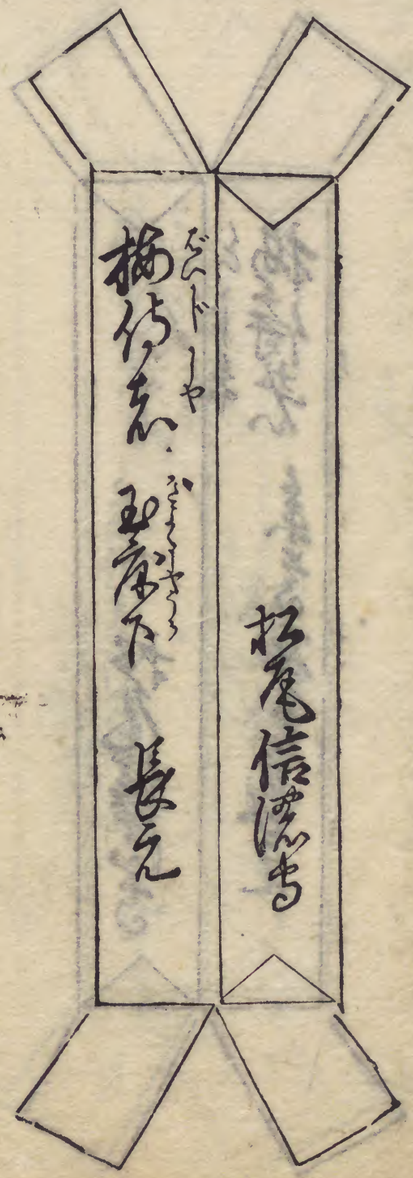
一いつの世を忍ぶ人の
烏帽子ぬぎ捨て
ましを向ひ給ふ

一仏ちんの書れ物
たゝへよりて貴姫
をこれあり



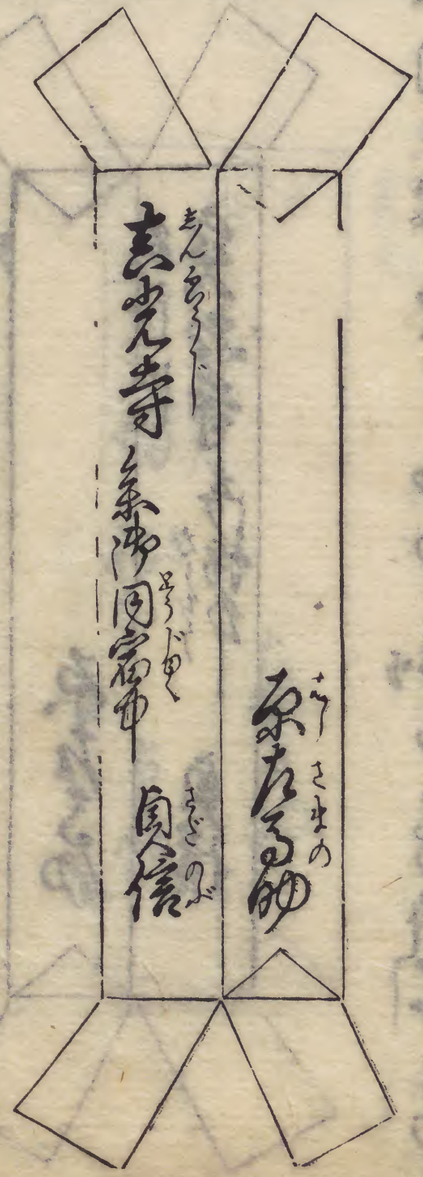
一貴姫ら祈い法師
あり

一 おれんまつ同らのおつしゃるかたざりおつ同おるや
どの紙やうなもわ



一 同やうな紙ようよりてたかおくもが
なるなりまつけがさ同おのもとうえ
しし

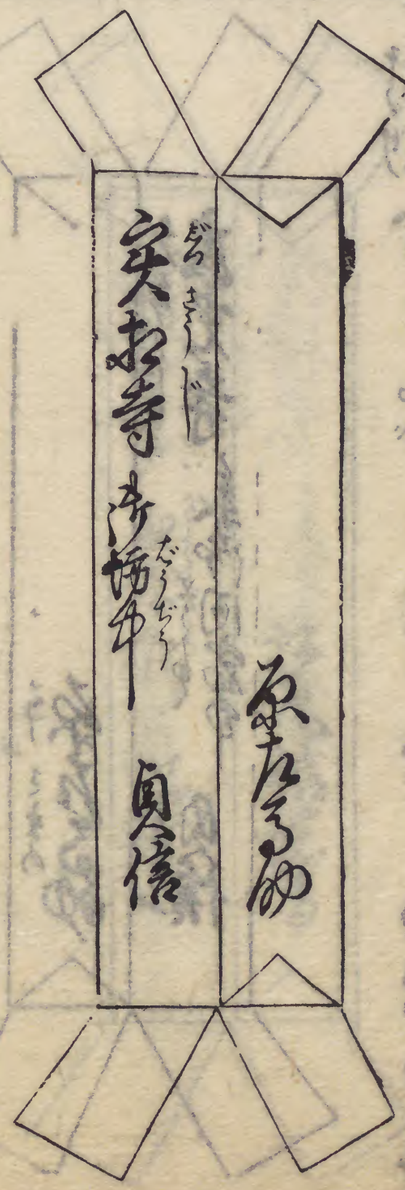
一 きやうこ家への書様町ばとくもおとのやう貴殿
此紙也ようしくかるべし



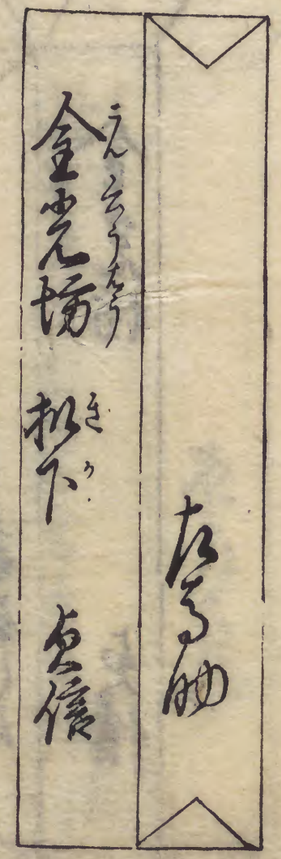
一 御家への書つぶて表おうしおるのもの
様あるこかの時よりもの下様とおくの家様
わるべし

一まことに貴殿なりさりながら右のごとく

一同ものがたりかの辞なりぬるは字をあるを
ぬぎ申ぬ[illegible]ものとつ云うまは出橋申とつ云うとしたまへ
を立のなりなり

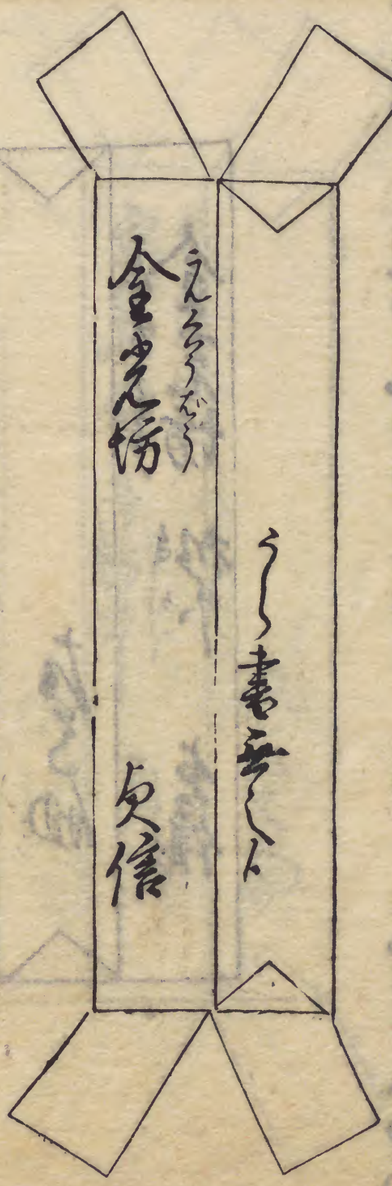


一これはさけうの中やうなりぬ申ものとおの用れ
い句編なり



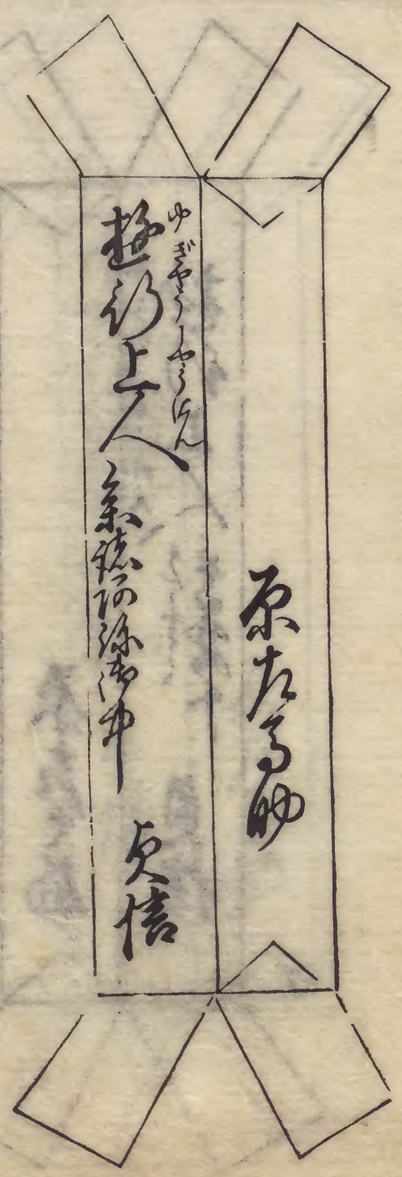
一かやうの時はぬをもるるしたとくぬ下とおる
しやうりわくなりぬ[illegible]ぬさい[illegible]だうり
なり

一これはいのとをつくさげくうの数也



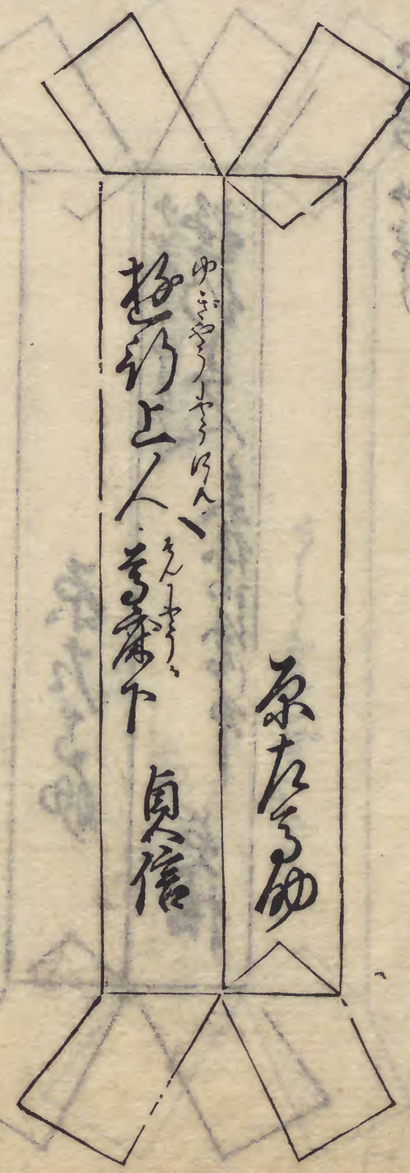
一いろに紙ふうの色やうのこと和紙まを勿論
きりはくう書あり
ふるくあり

一極ゆ上人の書給うけたり。これはいろはも書状書
綱やうあり
ふるくあり



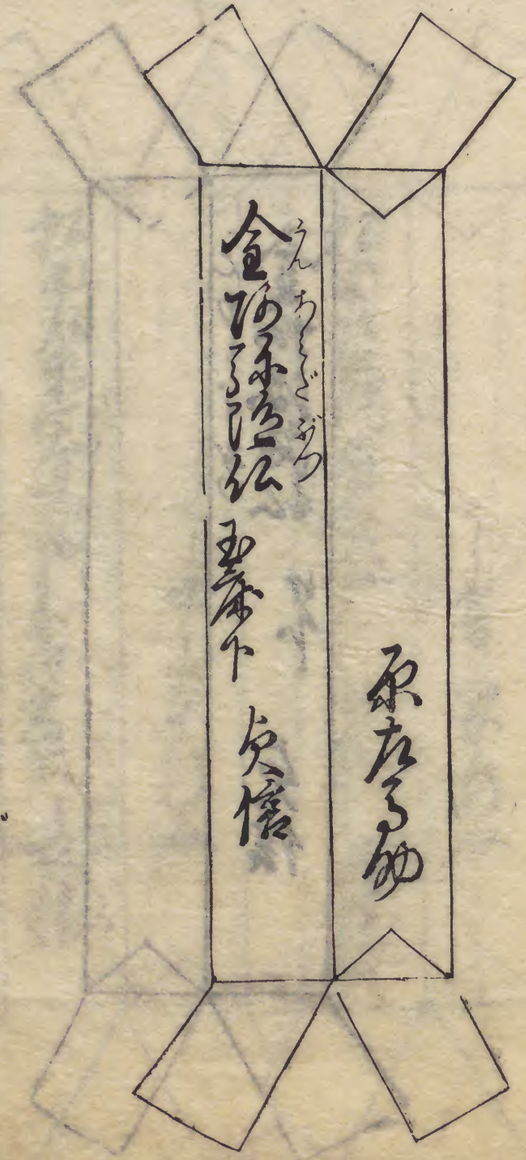
一極楽の極ゆの中ハ。のこれどありちひ書人
但人ひとりとく書状を勿論なり

一ふたを貴殿ありのさりかうしきりかろ



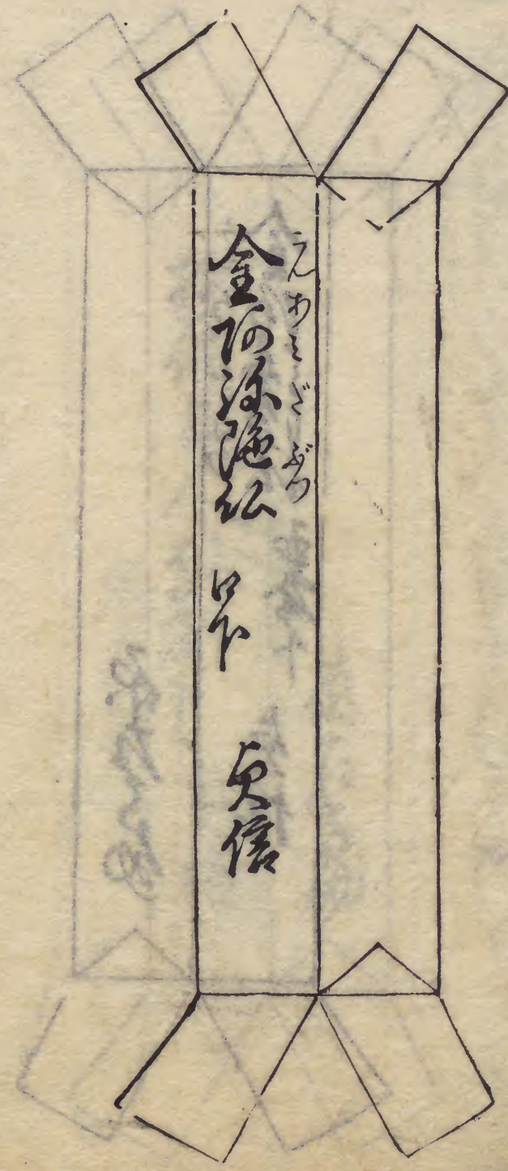
一同事ぶ〻ぶあわせものかろさ五寸下ぶ
下ぶ〻を細方をきく〻ぶし

一だう〻きう〻ぶの細やうしぶ三寸下ぶ
れかうぶ〻ぶ結〻んぶ



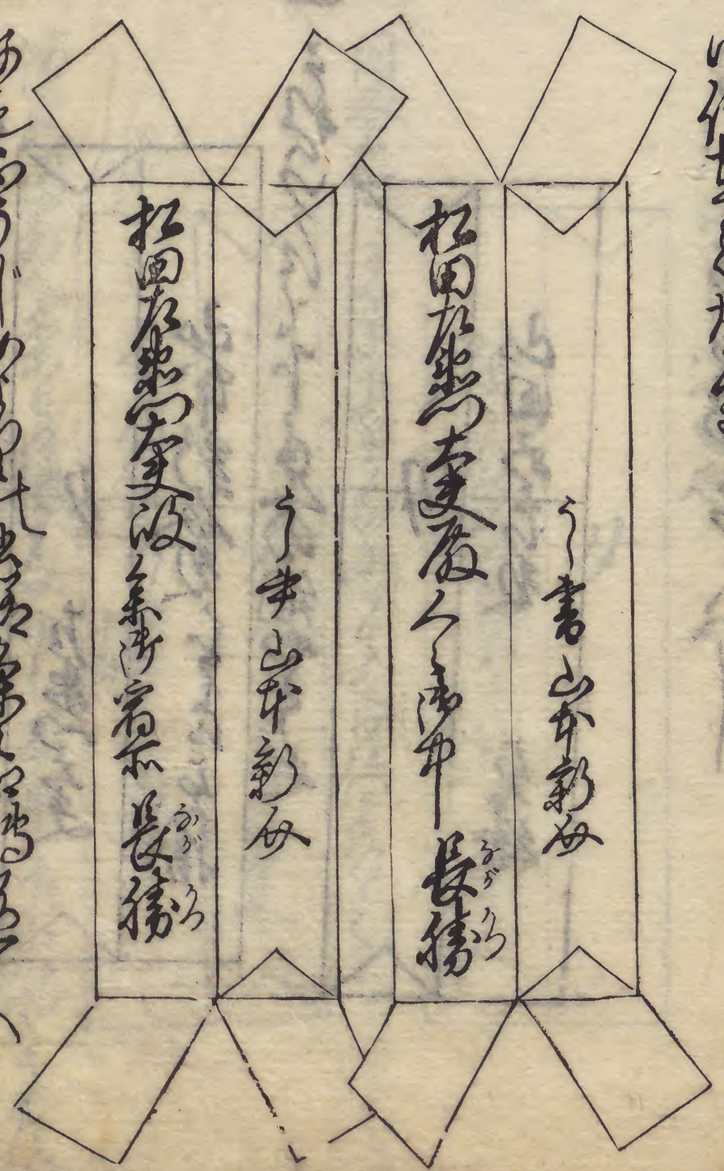
一ぬきのゝ紙ぶと書ぶしてぶ号と書きき
貴殿ぶ〻ぶ

一これいろいろをさげそう紙やうあり



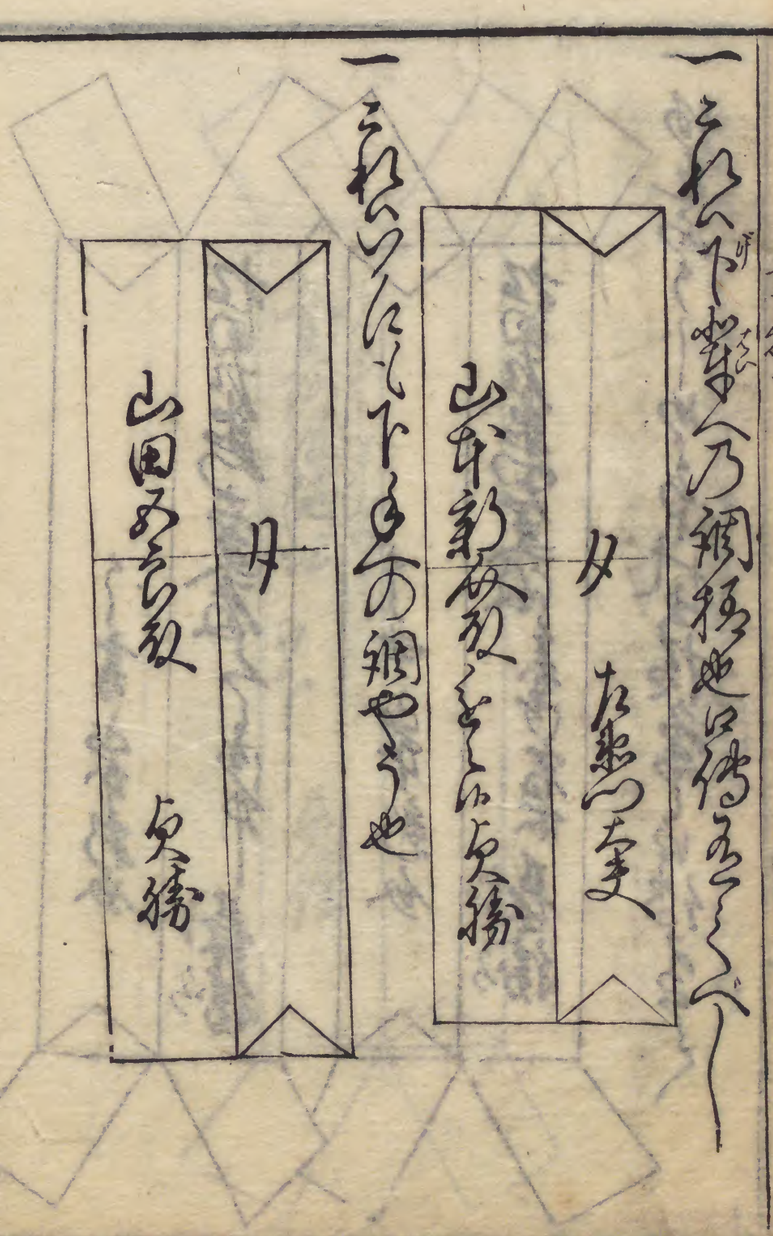
一日なぞこれるまきけて紙と同じ泳法をまきまし
ぶんぶの時はうつ書もやうくしかも

一ひらかさもうえのとおりにて下めとお紙へしぶ付まて家
は仮をくなるまで



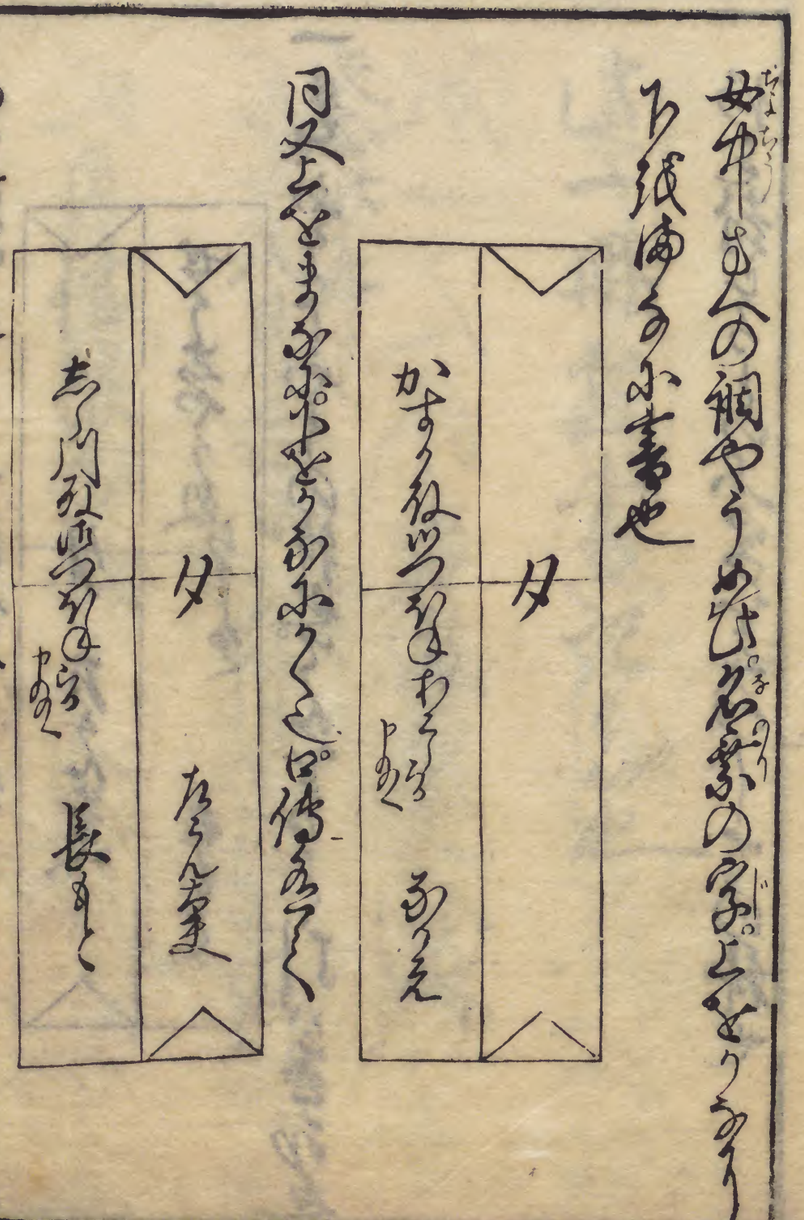
一何をふうじめうもの出掛家には仮をくる

一 これを下紙へ乃網引地に仕立てくべし



一 これを下紙へ乃網やうに仕立てくべし

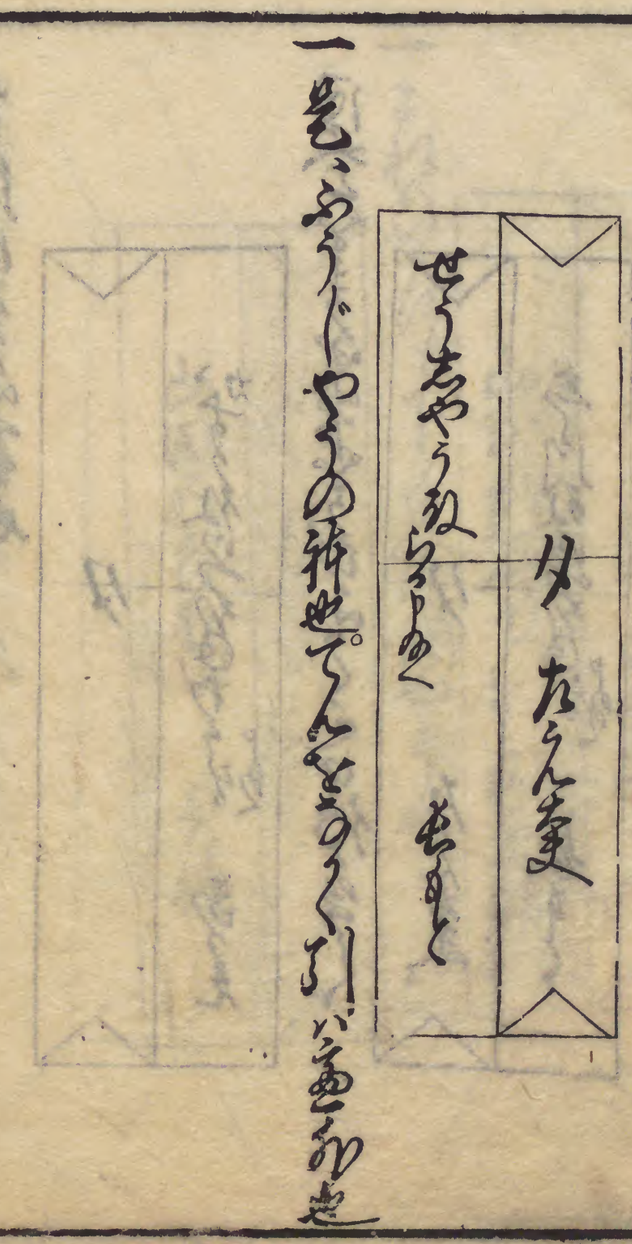
如中 上の網やうに仕立て巻くに仕立てくべし



下紙海の小書地

同文をまきかぶせ仕立てくべし

何も同様に巻き仕立て上下共やうに仕立巻をとくべし



以書状ハ、ぞれ〳〵ぞ紙ゝ〳〵ゝ
字をあらまじ候ハ、
一紙ゝふうじやうの作也でんをゝ引ハ書和也
外ゝ封ゝとしてゝ字をゝしての作也

以一冊認書記也

天正廿年　右近太夫入道
八月吉日　沙弥宗拙判

信濃守殿

此一冊先考國棠公之御先
父貞慶相傳之通狀正本也
寛軍先代忠隆為書之趣
既一人外無氏族紀作者
為之忠義之先別而祝加熊

寛作者代々由緒之趣
為也

小笠原長祥志補

文政
八月二日

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan